蜜柑

佐左木俊郎

一

お婆さんはもう我慢がしきれなくなって来た。けれども彼女は、しばらくの間を薄い襤褸（ぼろ）布団の中で、ただ、もじもじしていた。

厚い板戸を隔てた台所の囲炉裏端（いろりばた）では、誰か客があるらしく、しきりと太い話し声がやりとりされている。折々大きな笑い声も洩れて来る。慥（たし）かに誰かが来ているらしい。お婆さんは布団からそおうっと顔を出して見た。併しお婆さんは、また躊躇（ちゅうちょ）した。そして室の中を見廻した。

室（へや）の中にも晩秋の寂寥（せきりょう）は感じられた。障子の上には、二尺ぐらいの高さのところまで、かんかんと陽（ひ）があたっている。死に残った四五匹の蠅が、陽のあたった白い部分で、ぶぶうっと紙に突きあたっている。ところどころの、破れて垂れ下がった紙の上には、薄黒く埃が溜まっていた。

台所の囲炉裏端からは、再び大きな笑いの声が起こった。

「本当、豆でも買って、まめになんねえで、どうもこうも……」

ひどく嗄（しゃが）れた、老人らしい声であった。

「ほんでぇ、俺家（おらえ）の婆様（ばんさま）にも豆買いでもさせんべかな。」とお婆さんの伜（せがれ）の治助は笑いながら言った。

「此方（こっち）の家の婆様（ばんさま）なんか、何が……りっきとした息子があんのに。」

老人らしい声は、語調を力（つと）めて言った。

慥（たし）かに誰かが来ている。——とお婆さんは思った。

そう思った瞬間、客があるという意識で、お婆さんは小児のような心理状態に置かれた。

「松！　松！　松はいねえがあ？」

お婆さんは、咽喉（のど）に引っ掛かるような声を搾（しぼ）って、二番目の孫娘を呼んだ。併し、それにはなんの答えも

なかった。

「松！　水一杯呑ませて呉(け)ろちゃ。」と、お婆さんは続けた。そして咽喉をごくりと言わせた。

やはり、なんの答えも返っては来なかった。一時杜絶(とだ)えた囲炉裏端の話し声は、再びひそひそと続けられているらしかった。お婆さんは、青い静脈の浮いている瞼(まぶた)を静かに閉じた。そして唇を動かした。また咽喉がごくりと鳴った。

「駄目だ駄目だ。水なんか呑ませじゃ駄目だ。婆様は水を呑ませっとすんぐに寝小便だから……」

こう言っている声を、たしかにそう言っている声を

お婆さんは聞いたように思った。

蒼白（あおじろ）い瞼（まぶた）の陰（かげ）には、いろいろな場面が繰（く）り展（ひろ）げられた。六十幾年間の自分自身の苦闘の姿であった。そこには、寝小便ばかりではない。食事最中にまで、自分の懐（ふところ）で糞（うんこ）をした伜や孫がいた。そして、一旦老衰の床に就くと、一杯の水さえ自由に与えられない自分自身の姿が、自分の瞼の裏に描かれていた。

障子の上で、ぶぶうっと紙に突き当たっていた蝿が一匹、お婆さんの瞼へ来てとまった。お婆さんは閉じたままの瞼をひくひくと微動させた。蝿はすぐに飛び去った。睫毛（まつげ）の間には、小粒の涙滴（るいてき）が、一列に繁叩（しばたた）き

出された。

二

お美代が土瓶（どびん）と飯茶碗とを持ってはいって来た。足音でお婆さんは布団の襟に眼をこすりつけた。

「婆（ばば）さん、ほら、水持って来したで。」

「うむ、水！――どうも眼が霞（かす）んで。」

お婆さんは口まであけて、顎（あご）をこすりつけているように、顔を布団に埋めながら低い声で言った。

「あ、お美代が？　今朝来たのが？」

「うむ、今朝。」と、うなずきながら、お美代は茶碗に水を注ぎ満たした。

「大変（おっかねえ）まだ早ぐ来たで。——どんな風だ大崎の方は？　仕事の早い処だぢ、田畑（たはた）の仕事は片付いてしまったがあ。」

お婆さんは静かに寝がえりながら、低い消え入るような声で吐切れ吐切れに言った。お美代は茶碗を取ってお婆さんの方へ出した。お婆さんは布団の中から、瘦せた青筋の節（ふし）くれだった大きな手を出したが、手はなかなか伸びそうもない。手よりも先に、頤（あご）の方が出て行った。

「なんだけえ、まず、お美代。汝（にし）の手は……」
お婆さんは、ごくりごくりと咽喉（のど）を鳴らしながら水を呑んだ。お美代はすぐに眼を伏せて、膝の上の自分の手を見た。玄（くろ）い肌には一面の赤い皸（ひび）だった。節々（ふしぶし）は、垢切（あかぎれ）に捲かれた膏薬で折り曲げもならぬほどであった。
「新田（にいだ）の方はそんなに仕事がひどえのがぁ、お美代。――新田さ嫁に行ぐが、鉈（なた）で顔剃らせるが――って話は聞いでいだげっとも。」
「なじょして、この辺（へん）の男達よりも、もっと荒仕事しさせられんのだもの、新田の方では。」
「女の仕事の荒いの、新田のようだって言ってるぐら

いだから……」
お婆さんは、また枕に頭を横たえた。電話口へ耳をあてるようにして。
「おらは、どこさも行がねえもは、婆さん。一生家にいで、独身（ひとりみ）で、叔母様ではぁ、この家にいで稼いで助けるもは。おら、どこさも行がねは。」
「うむ？　それさな。――やっぱり、新田さ行ぐより、町さ行った方がよがったがな。」
お婆さんは、自分がこの老衰の床に就く一月ほど前、町の方へ嫁に行くことに話が纏（まと）まりかけていたお美代を、無理矢理に新田へ、土地の素封家（そほうか）だと言うことだ

けで、いろいろと口説き落とした自分であったことを、ぼんやり思い出した。

「やっぱり、町さ行った方がよがったがな。財産など、なんぼあったところで、お墓の中さまで持ってがれるもんでねえし……」とお婆さんの話は、なんだか自分のことを言っているようでもあった。

お美代は前掛けの端を噛んでいた。そして、その前掛けで折々眼を押さえた。

「俺も、若え時(わけ)、牛馬のように——やっぱり、町の方さでも片付けば……」

「町さもどこさも、おらどこさも、一生どこさも行か

ねえは、婆(ばば)さん。」

お美代は到頭、両手で掩(お)うた顔を、お婆さんの布団の端に伏せた。やがて歔(すす)り泣(な)きは、声にまでなって来た。

三

「こっちの婆様(ばんさま)も、弱ってるぢでねえが？」

声と一緒に、外から障子を引き開けたのは、豆腐を売って歩く弥平爺だった。お婆さんはすぐ眼をあけたが、太陽の光線を受けて眼叩(まばた)きを繰り返した。寝た位

置がよかったので、ちょうど障子の間から出した顔と対していた。

「なんだ婆様、ひどく弱ったでねえが……」

弥平は、頬骨（ほおぼね）の突き出た白髪の頭をお婆さん方へ寄せた。けれども、お婆さんは、眩（まぶ）しそうに眼を開いたまま何も答えなかった。

「婆（ばば）さん、弥平爺様（じんつぁま）だ。豆腐屋の弥平爺様だ。」

お美代は布団を軽く叩いてやりながら言った。お美代の顔には血の気がいっぱい上がっていた。

「眩（まぶ）しいんだ。眩しいんだ。」と弥平爺は、自分の顔でお婆さんの顔へ日蔭をつくった。

「うむ。珍しい人が来なしたで……」
お婆さんは、遠い遠い昔の記憶を呼び起こすようにして、頬の上に微かな笑いの線をうごめかした。
「それさな。こっちの家の姉様が、こんなに大っきくなって、嫁御（よめご）に行ってるぢのだがら。」
「仙台の方さ行って、大変（おっかねえ）儲けだぢ話聞いだっけ……」
「なあにな。俺もな婆様、ひでえ長患（ながわずら）いしてしまって、儲げだ銭どこでなぐ使ってな。」
「ほうお、爺様も患（わずら）ったのがね。俺もこれ、この大（お）っき孫、嫁にやってがら、こうして床に就いたきりで…

……」とお婆さんは眼を閉じた。

「それに爺様も亡くなったぢね？　こっちの爺様は面白い人でなあ。爺様に、頭の髪さ赤い布片（きれ）でも縛って、少しの間、廉（やす）ぐ売って歩いで見ろ――って言われたごとあったが、俺なあ婆様、そうして見だのしゃ。ほうしたら、売れで売れで、凍り豆腐は、あの爺様のでねえげ駄目だぢ評判で、随分儲げだのだげっとも……長患（ながわずら）いして、残した銭も、しっかり使ってしまって、またこうしてこれ……」

弥平爺は、声を低くして哀れっぽい調子に語尾を引いた。

「ほんでも、まだ丈夫になったようですてや。丈夫で何よりだ。」

お婆さんは、また眼を開けて弥平爺の顔を見た。

「さっきの話であ、おめえ、頭の髪も、髪さ結び付けた赤い布片(きれ)も皆鼠に喰われでしまって、ほんで駄目なったのだ――って話だっけ……」

お美代は、囲炉裏端で弥平が、人を笑わせ自分も笑おうという意識で話したこの話を思い出して、手で口を掩うて笑った。

「そう言うごとにでもしねえげ……」と弥平は、淋しい笑いを笑おうとした。併しそれは、笑いにはならず

に、僅かに口辺の線が歪(ゆが)められたきりであった。

　三人とも口を緘(ふう)じられた。どしんと大きな沈黙を横たえられた感じだった。お婆さんは眼を開いて弥平の老(お)い窶(やつ)れた淋しい顔に視線を据えていたが、それも長くは続かなかった。すぐまた眼を閉じてしまった。

「さあ、俺もそろそろ帰(けえ)るとするがな。」

　弥平爺は、しばらくの沈黙の後、腹掛けの丼(どんぶり)を探りながら言った。そして、鞣革(なめしがわ)の大きな財布を取り出した。

「婆様、さあ、これで何が味っぽいものでも——爺の病気見舞だ。」

弥平爺は、五銭白銅貨を二三枚お婆さんの枕元へ撰（と）り出した。

「あ、爺様や、こんなごどしねえだって。」

「ほんとに少しばりだげっとも。――ほう、かれこれ正午（おひる）だ。どうも日が短けくて。」

「まるで、馬の手綱（たづな）のような……」とお美代は、弥平爺の財布の紐（ひも）の太いのを笑った。

　障子を押し開いて、お美代は縁側に弥平爺を見送った。お婆さんは、額縁に嵌（は）められた風景画のような秋色の一隅を、ぼんやりと、潤（うる）んだ眼に映していた。

「ね、おめえも、早く帰（けえ）んでえすぞ。俺も若（わけ）え時、婿（むこ）

に行ったどこ逃げ出した罰で、今になってこれ……」
　庭先で弥平爺は、こう、お美代に言っていた。
「なんぼ貧乏しても、田作る百姓、飯だけ喰えんだから。ね、早く帰って、辛(つれ)えくっても、辛(つら)くて死ぬようなごとねえんだから、悪いごど言わねえ、辛抱していんでえす。」
　弥平爺は、この言葉を、お美代のために言い残して帰って行った。併し、この言葉は、お婆さんも遠い昔の記憶の上に、現実とかけはなれた不思議な韻(いん)で聞き返すことが出来た。

四

その晩、お美代が隣の風呂から帰って来た時、お婆さんは雨戸を繰(く)り開(あ)けて、縁側に蹲(しゃが)んでいた。月光に濡れて、お婆さんの顔はなお、一入(ひとしお)蒼白かった。

「そんなところで、何しているの？　婆(ばば)さんは。」

お美代は、雨戸に手をかけてその後ろに立った。

「柿の葉も、皆落ちでしまったなは。」

お美代も、お婆さんと一緒に戸外の景色を眺めた。

――実をもぎ取られた柿の樹は、その葉も大方振り落として、黒い枝が奇怪なくねりを大空に拡げていた。

柿の樹の下に並んだ稲鳰(いなにお)の上に、落ち散った柿の葉が、きらきらと月光を照り返している。桐の葉や桑の葉は、微風さえ無い寂寞(せきばく)の中に、はらはらと枝をはなれている。遠くの木立ちは、すべて仄(ほの)黒く、煙りだっていた。そして、丘裾の部落部落を、深い靄(もや)が立(た)ち罩(こ)めていた。

「婆さん。風邪(かぜ)引ぐど大変だから。」

お美代は、いつまでも戸外の風景に眼を据えているお婆さんを促(うなが)した。

「うむ。――今年は、稲鳰(いなにお)、六つあげだようだな。小作米出した残りで、来春(らいはる)までは食うにいがんべな。」

「鳰一つがら、五俵ずつ穫(と)れでも……婆さん、そんな

心配までしねえだって。さあ、風邪引ぐがら。」
「うむ。小便しさ起ぎだのだげっとも、動がれなくなったはぁ。――俺、米の無くならねえうぢに死にでぇんだ……」
「そんなごと言って、まだ死んでられめちゃ、婆さん。」
お美代は、蹲(しゃが)んでいるお婆さんを、後ろから、室の中に抱き入れた。
床の中は冷たくなっていた。夜の冷気は犇々(ひしひし)と身に迫って来た。お婆さんは、両足を縮(ちぢ)めて、小さくなって見たが、やはりぞくぞくするばかりであった。だが、寝床の中で震えながらも三十分間ばかり我慢して見た。

併し、お婆さんは、いつまで経っても、もう寝床に親しむことが出来なかった。このまま凍り付いてしまいそうにさえ思われた。

「松！　松！　松やぁ！」

お婆さんは、お美代を起こす気にはなれなかった。

「松やぁ！　お湯わかして呑ませて呉(け)ろ。」

併し、誰も返事をしてくれるものは無かった。お婆さんはまた自分の寝小便を思い出した。眼だけが温かくなって来た。

しばらくすると、誰か囲炉裏(いろり)の方へ起きて行く気配がした。お婆さんは耳を澄ました。足音は戸外へ出て

行った。ごくりと唾を嚥(の)み下(くだ)して、お婆さんは出来るだけ小さく身を縮めた。

　静寂(せいじゃく)な闇の中に、やがてハリハリと杉の枯れ葉の燃える音がした。続いて枯れ柴のパチパチと燃え上がる音がして来た。

「婆(ばば)さん、今すぐわぐがらね。」

　お美代が、自分の家で拵(こしら)えた粗末な燭台を手にして這入(はい)って来た。お婆さんは、感謝の念だけで口がきけなかった。その灰色にまで垢染(あかじ)みた枕は、ぐっしょり濡れていた。

「なんだけな婆さんは、枕、こんなに濡らして……」

お美代はこう言って、お婆さんの白髪頭を持ち上げ、濡れた枕を裏返しにしてやった。

「すぐわぐがら……」

お美代はすぐ囲炉裏端へ引き返した。

台所で器物を探す音がしばらくしていた。そしてお美代の持って来た茶碗の中には、その底にぽっつり味噌が入っていた。

「味噌湯の方、身体（からだ）温（あった）まっていがんべから……」

お婆さんは床の上に起きかえって、茶碗を、両手で捧げるような手付きで、フウフウと吹きさましながら、続けて二杯も呑んだ。

「ああ、美味(うま)がった。甦(いきげ)えったようだちゃ。身体も温(あった)まって……」
「ほんでは、これでいいが婆さん。」
お美代は、持ち上げられて隙間の出来た布団を、上から押し付けてやった。
「死んでも忘れねえぞ、お美代。」
「寒ぐねえが、婆さん。」
「なあ、お美代、大崎さは行ぐなよ。なんでもいいから、楽の出来っとごさ行げ。俺死ぬ時、汝(にし)は、町場さ嫁にやるように遺言(ゆいごん)して死ぬがら……」
「俺、大崎など、死んでも行がねえ。婆さんは、まだ

枕こんなに濡らして。」
お婆さんの枕は、またぐっしょりになっていた。お美代は自分の手拭いを四つに折って敷いてやった。彼女の眼にも熱いものが湧いて来た。低声（こごえ）の会話の中に、鼠の走る音と、家人の鼾（いびき）の音とが折々はさまれていた。

五

感激が祟（たた）って、お婆さんは夜明けまで興奮し続けた。うつらうつらとまどろみかけたのは、それからであった。

「ナア！　ナア！」いう細い消え入るような声で、眼が覚めた時には、短い日はもう十時を廻っていた。

枕元には、いま障子の破れ穴から飛び込んで来た三毛が、ぶるぶるっと毛繕（けづくろ）いして、ものほしそうに鳴いていた。猫の鼻先には、粥（かゆ）の土鍋と梅干の器物が置かれてあった。廊下の日向（ひなた）には、善三が、猫の午睡所を占領していた。

「善三があ？　善三。」

お婆さんは、低い嗄（しゃが）れた声で、障子にうつる影に呼びかけた。

善三は、青い篠竹（しのだけ）を三本切って来て、何か拵（こしら）えよう

としているのであった。昨日の午後、お婆さんから蜜柑を買って来るように言い付かって、五銭白銅を二枚持って出て行ったきり、そのままお婆さんのところへ寄り付かなかったのであったが、もうそのことも忘れているらしかった。

「昨日な頼んだ蜜柑はやあ？　善三。」

「蜜柑、どこにも、無(ね)がった。」

「蜜柑が無がったあ？　ほして、銭はやあ？」

「蜜柑が無がったがら、俺、飴玉(あめっこ)買った。」

「咽喉(のど)渇いて仕様ねえがら、蜜柑買わせっさやったのに、飴玉など買って……ほして、その飴玉はやあ？

汝（にし）あ、一人で食ってしまったのがあ？」

お婆さんは、粥鍋（かゆなべ）の方へ行こうとする三毛の足を引っ張りながら、ぶつぶつとこぼした。

「一人で食（か）ねえちゃ。貞ど菊さもやったちゃ。」

「この野郎は、ほうに、仕様のねえ野郎だ。」

その言葉の中には、幾分の愛情が籠（こ）められていた。

「ほだって、蜜柑が無（ね）えもの……」

善三は、一生懸命に竹を削りながら、ずるずるっと洟（はな）をすりあげた。

「ほんじゃ、水持って来て呑ませろ。蜜柑買って来ねえ代わりに。」

「厭（や）んだ。父（おど）に怒られっから厭んだ。」
「ほんとに、この野郎まで、なんとしたごったやなあ！……」
お婆さんの言葉には、悲壮、というような余韻（よいん）があった。
「お美代姉はやあ？　善三。」
しばらくしてから、お婆さんは言った。
「今朝早ぐ、父（おど）と一緒に、大崎さ行ったは。」
「大崎さ？　まだ行ったのが？」
お婆さんの顔には、悲哀の表情が浮かんだ。悲哀というよりも、むしろ悲壮といいたい表情、歯を喰いし

ばるようにして眼を閉じたのであった。瞼（まぶた）がひくひくと微動していた。

「美代姉は、厭（や）んだって言ったの、父（おど）、行がねえごったら、首（くびた）さ、縄つけでも連（つ）せで行ぐどて。お美代姉、泣いでいだけ。」

お婆さんは眼を閉じたまま、なんにも答えなかった。

そして、しばらくしてから、独（ひと）り言（ごと）に呟（つぶや）いた。

「あのがきも、生きでるうぢは、楽など出来めえ、牛馬のように……」

言葉は、涙に遮（さえぎ）られて、低く語尾を引いた。

こうは言ったが、お婆さんは、お美代の身の上を哀

れに思うよりも、お美代を失った自分の身の、死期までの寂しさ、すべての不自由を思わずにはいられなかった。

——昭和二年（一九二七年）『随筆』二月号——

底本：「佐左木俊郎選集」英宝社
　　１９８４（昭和59）年４月14日初版発行
初出：「随筆」
　　１９２７年（昭和２）年２月号
入力：田中敬三
校正：林　幸雄
２００９年３月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。